

伊豆半島伊浜における地理学的研究

鶴 尾 進 子

東京では霜柱がたっているま冬でも、伊豆半島の南岸では露地のまま花が咲きみだれて、東京を中心とする冬枯れの各市場に、花を比較的安価で大量に供給している。調査地域の伊浜は伊豆半島南西岸にあり駿河湾に面している100戸あまりの部落であるが、マーガレット・グラジオラスを主とした花作り部落として知られている。研究は伊浜の主産業である花栽培と地理的諸条件との関連を明らかにすることを中心におこなった。

伊豆半島は、鮮新世から洪積世にかけて噴出した海成火山の噴出物からなっていて平坦地・沖積地はさわめて少ないのであるが、特に西海岸では沈降性地形が示され、火山性山地が直接海に接している。伊浜は洪積世に噴出した蛇石火山急斜面のわずかに開けた部分に立地した部落で、西田を山と海に囲まれ、いまだに交通路（自動車道路）が得られず孤立的・隔絶的な性格がつよい、耕地が少ないので、昭和の初めまで磯漁業・炭焼業などで生計がたてられてきた。

伊浜における地理的特色は無霜地であることで、これは南は暖流の海に面し、西・北・東の三方面は構造線・断層線に支配されてきた陽あたりのよい南向き山地斜面で囲まれているという海洋性気候と地形的影響とによって生じている。南伊豆沿岸に形成される各無霜地の気温を調べたところ、伊浜はその中でも冬に相対的に高い気温を保ち、無霜地としての優秀性が示されている。伊豆半島西岸では冬の北西風が強いこと、全体に急傾斜地であることなどによって気流が停滞しにくく、その結果霜が結ばれにくいという条件もあいまっていると思われる。

昭和に入り、伊豆一帯は無霜地であることを生かしてキヌサヤエンドウの早期栽培がはじめられ「成金豆」としてもはやされた。伊浜でも一時はこの栽培がとり入れられたが、無霜地として優秀なため、昭和8年に房総半島の栽培者によってもたらされた冬の露地によるマーガレット栽培がはじめられた。マーガレットは耐寒性が弱く、冬の露地栽培は困難な花であるが、伊浜での栽培は霜害・寒波、被害にあうことなく成功し、伊浜は以後現在まで全国的なマーガレット特産地として位置づけられている。

伊浜での土地利用の特色は急斜面が花栽培用の段畑としてよく利用されていることで、耕地が少ないためもあるが、南向き斜面は周辺で最も暖かい部

分であり、冬の花栽培に適することがその主な理由となっている。特に部落西側斜面の段畑は、南東方位のため冬の北西季節風に直面せず陽だまりとなるため、マーガレット畑が集中し、かなりの急傾斜の部分にまで及んでいる。花はビニールハウス・フレームなどを用いない完全露地栽培であるが、冬の北西季節風を防ぐため防風垣がほどこされ、栽培にも各種の防風技術が工夫されていることがわかる。

戦前、マーガレットは冬の白花としてかなり珍重され高値であった。戦後直後も花は貴重視され栽培熱は高まり、マーガレットは全国一の出荷量・出荷圏を記録したのであるが、昭和30年ごろになると忌地性・立枯病の発生で栽培が順調にいかなくなり、相場の低下とあいまって現在では一定量の栽培にとどめられている。マーガレットの衰退期と前後して、グラジオラス栽培が導入された。グラジオラスは畑で栽培すると連作障害が強く、栽培が長つづきしないのであるが、伊豆では水田栽培を試みて成功し、よく連作障害をまぬがれることができた。水田の裏作に適すること、マーガレットより高値であることによって、グラジオラス栽培は急速に部落中に普及し、現在では伊豆で生産されるうちの半数以上をしめて、グラジオラスの主産地として扱われてきているといえる。

以上諸点から、伊豆の花栽培に関して次の点がまとめられる。耕地が少なく、半農半漁の懇細経営であるため、花は栽培技術が容易で、生産費のかからぬものがえられる。また奥地において市場の動向を敏感に反映できないため、投機的なものは避けられ、需要の安定した花を特産または得意の種目として確保し、大量に植えつける。輸送条件は著しく不利であるが、無霜地として優秀なため特産花をもち、良質の花を一定して出荷できる実績を保って、よくその不利を克服している。

近年、南伊豆の観光開発ブームとあいまって、昭和41年にはようやく半島一周線の自動車道路が伊豆に達し、部落の発展が予想される。特に観光面では、伊豆の西において部落が権利をもつ景勝の野猿生棲地・波勝崎のほか、花も観光資源として役立つので発展が期待されているが、現在のところは確言しがたい。